

令和元年6月3日現在

機関番号：32612

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2014～2018

課題番号：26284061

研究課題名(和文) 手話言語の文法における「非手指的要素」の意味的・統語的性質の研究

研究課題名(英文) Semantic and syntactic properties of non-manuals in sign language grammar

研究代表者

松岡 和美 (MATSUOKA, Kazumi)

慶應義塾大学・経済学部(日吉)・教授

研究者番号：30327671

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 10,000,000円

研究成果の概要(和文)：統語研究では、モダリティ・否定・省略・話題化などの構文に現れる手指および非手指表現の言語学的性質の記述と考察を行った。愛媛県大島の宮窪町でろう者と聴者が共有する宮窪手話の記述を行った。学校法人明晴学園と協働し、日本手話を母語とするろう乳児と保護者の対話コーパス作成を始め、一部の分析結果を学会で発表した。成人の手話学習者の代名詞やうなずきに関する知見を得て、大学での手話クラス運営について考察を行った。数量詞の解釈に見られる空間使用の国際比較研究を開始した。これらの研究活動の多くで、ろう者の共同研究者が重要な役割を果たしている。ろう者・聴者が同時に参加できるワークショップを2年にわたって開催した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

先行研究ではまとまった記述がないモダリティ・否定・省略などの言語現象について、日本手話の文法パターンの基礎データをまとめ、国内外の手話言語学関連学会や学術誌で発表できた意義は大きい。進行中のろう親子の対話動画コーパス作成への海外研究者の関心も高い。本研究で得られた知見は、日本手話版DVD付の手話言語学概論書や、代表者が監修を務めるNHK Eテレ「みんなの手話」に活かされている。宮窪手話の研究成果は一般雑誌や海外のウェブ記事・NHKドキュメンタリー番組で取り上げられた。宮窪手話・ろう児の手話発達・かな文字由来の手話研究などは、ろう者の共同研究者が主体となって調査・分析・発表を行った。

研究成果の概要(英文)：Our syntactic analysis revealed the linguistic properties of manual and non-manual expressions used for expressing modality, negation, ellipsis, and topicalization. A documentation project of Miyakubo Sign Language, a shared sign language in Ehime, has been conducted. In a joint project with a school for the deaf, we have created a corpus of deaf children and their parents, and preliminary observations were presented at an international conference. Our L2 team conducted research on L2 learning of Japanese Sign Language (JSL), and discussed possible improvements of college-level JSL curriculum. Various results of our research project were incorporated into an introductory textbook of sign linguistics (in Japanese and JSL) and a weekly JSL class on the national TV station. Deaf members played major roles in most of those research activities. Over two years, we organized sign linguistics workshops where deaf and hearing participants collaborated to describe linguistic patterns of JSL.

研究分野：言語学

キーワード：日本手話 非手指表現 ろう児の手話 モダリティ 否定 手話教育 宮窪手話 手型

1. 研究開始当初の背景

手話言語の文法が音声言語のそれと同様の規則性や抽象性を持つことは、現代の日本社会で十分に認識されているとは言えない。その大きな原因となっているのは「手話 = 手 (のみ) を使うコミュニケーション」という誤った認識である。いわゆる NM 表現には、統語的特性を持つものや、感情・情意に関連するものなど、様々な文法的・談話的特性を持つものが含まれる。少なくともある種の非手指表現と手指表現は、手話言語の性質をとらえる際に完全には切り離せない緊密な関係にあり、その特性の解明は手話言語学における重要トピックのひとつである。日本においては、ネイティブサイナー自身が、その抽象的特性を理解する機会も、それを他人に説明できるスキルを育む学術的訓練を受ける機会も、皆無に近い状況が続いている。ろう者も聴者と同じように感情の動きを顔の動きによって表すこともあるため「感情表現としての顔の動き」と「文法的な顔の動き」を区別することは、言語学の知識を持たない者にとって容易ではない。言語学を専門とする聴者も、日本手話に関する先行研究が極端に少ないことや、手話習得の機会の少なさもあり、ろうコミュニティが必要とする知見を提供するには至っていない。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ネイティブサイナーが母語とする手話言語の文法における「非手指的な表現 (手指以外の表出部分)」と「手指による表出部分」の組み合わせに見られる意味的・統語的性質を探究することである。ここで言う「非手指的な表現」には(1)NM(非手指)表現(NMS, NMMとも呼ばれるもの。眉・目・頬・口・頭や肩の動きなど)(2)指さしや動詞にみられる空間の利用が含まれる。ろう児の手話発達(獲得)や、島しょ部に見られる手話変種の調査も同時に行う。

3. 研究の方法

本研究では「NM 表現」「手話表現の空間利用」「ワークショップ運営」「手話獲得・日本手話方言の調査」を主たる活動と位置づける。形式意味論・統語論・レキシコン研究の分野で経験を積んだ研究者が「聴覚(音声言語)」「視覚(手話言語)」のモダリティを超越した人間言語の性質について考察する。海外の手話研究者との議論を通して、手話言語の普遍性・多様性についての知見を深める。データ提供者は原則として「(日本手話話者を両親に持つ)デフファミリー出身のネイティブサイナー」とする。データ収集や記述においては、できる限りネイティブサイナーの参加を奨励する活動に重きを置き、ろう者と言語研究者との交流を通して、ろうコミュニティと言語研究の知見を共有できるろう者リーダーの育成に貢献する。ろう児の手話と島しょ部の手話については、ろう共同研究者が動画を撮影し、コーパスを作成したうえで、分析を行う。

4. 研究成果

(1) 非手指表現と手指表現に関わる統語研究

2014年度(平成26年度)に、否定の首ふりを、語順や解釈に基づき2種類に分類した。談話標識としての機能を持つタイプの首ふりに注目した研究の成果を国内学会で発表した。2015~16年度(平成27~28年度)に、日本手話の省略に関する統語記述の共同研究に着手し、日本手話の目的語省略にも他の言語と同じくV-stranding VP ellipsis現象が確認できることを国際学会にて発表した。日本手話の省略に見られる特性の研究は現在も継続中である。2016年度(平成28年度)に、日本手話のモダリティ表現を用いて日本手話の right periphery の探求が可能であることを示した。10種のモダリティ表現の証拠性と連動する非手指表現(眉の動き)の分析結果を国内学会で発表した。2017年度(平成29年度)に、日本手話の否定表現とモダリティ表現の共起関係の制限を手がかりに、否定は3つ、モダリティは2つの異なる統語構造上の位置に生じていることを明らかにした。その構造的位置が語彙の形態・意味的な性質と深く結びついているとする仮説を提案し、2018年度(平成30年度)に、国内外の学会やシンポジウムで発表を行った。以上の研究成果をまとめた論文を、海外の査読付き論文集に投稿した。話題化の非手指標識については、2017年度(平成29年度)に、文頭の話題化要素に伴って生じる「眉上げ・うなずき」に加えて、文頭に生じる要素には話題化とは別の非手指動作が伴っている例も観察した。例えば「目細め(ないし視線変化)」であるが、これは従来 Referential Shift の非手指標識とされている。今後の研究でも、複数の非手指表現を厳密に見分けた上で互いの分布(特に共起関係)を記述する必要があることが確かめられた。

(2) 愛媛県大島宮窪手話の研究

愛媛県大島の宮窪町にはろう者と聴者が共有し、日本手話とは異なる語彙や文法的特徴を示す地域共有手話である、宮窪手話が存在する。2014~15年度(平成27年度)にかけて、

宮窪手話の数の表現・タイムライン・空間利用を記述し、国内外の学会にて発表した。ろう者が主導的な立場で行われた研究であることにも聴衆から強い関心が寄せられた。2016～17年度(平成28～29年度)に、一致表現および天体タイムラインのデータを追加し、ろう者と聴者が手話を共有する地域の歴史的・社会的背景に関する聞き取り調査を行った。その成果は2018年度(平成30年度)に、国際学術誌に査読付き論文として発表された。宮窪町出身のろう者である共同研究者によるフィールドワークの様子は、NHK Eテレ「ろうを生きる 難聴を生きる」「ハートネットTV」で取り上げられ、視聴者から大きな反響があった。

(3) ろう児の手話発達の記述研究・発達チェックリスト日本版の開発

2015～16年度(平成27～28年度)に、学校法人明晴学園と協働し、日本手話を母語とするろう乳児6名と保護者の録画とコーパス作成を始め、アメリカで開発された複数のチェックリストを日本手話版に改訂する作業に着手した。この作業の一環として日本手話の手型発達の記述を開始し、2018年度(平成30年度)には、国際学会でポスター発表を行い、明晴学園でのシンポジウムで教員・保護者などの関係者と情報を共有した。ポスター発表・シンポジウム発表で、ろう研究協力者が主たる役割を果たした。現在、ボストン大学の研究者と、日米のろう児のデータ比較研究が進行中である。

(4) 成人の手話学習プロセスの研究

2014～15年度(平成26～27年度)に、日本語を母語とする成人学習者を対象に、日本手話の代名詞の解釈を調べる実験研究を行った結果、音声言語を対象とする先行研究での観察と類似する反応パターンが観察された。手話言語のL2研究の事例は限られており、国内外で実施された理論系L2研究としては初めてのものである。2015～16年度(平成27～28年度)に、日本手話を習得している聴の手話学習者のうち「初級者」「中級者」「上級者」の3つのグループの発話データの非手指表現の分析を行った。その結果、「完了・未完了のうなずき」「韻律的特徴」などの明示的な教示が一切行われていない環境でも、上級学習者はある程度の韻律パターンを習得できることが明らかになった。これらの研究成果はNHK Eテレ「みんなの手話」テキスト執筆や、大学クラスの手話教授法の論考にも反映されている。

(5) 日本手話のかな由来表現の音韻的考察

2014年度(平成26年度)には、指文字が手話の語彙に取り入れられる際の音韻的な条件に関する研究に着手した。5人のネイティブサイナーにインタビューを行い手話動画データの収集を行った。2016～17年度(平成28～29年度)に、指文字が取り込まれて語彙化する「かな由来」の手話単語で、手話の音韻パラメータの1つである「位置」と、利き手の身体部位との接触の有無に関連性があることを明らかにし、ろう者の共同研究者が学会発表を行った。接触や追加の動きが手話単語の saliency (顕著性)を高めることを指摘した論文が、手話言語学の国際学術誌に掲載予定である(印刷中)。

(6) 手話の数量詞・代名詞表現の空間使用

人・もの以外の(intangible)指示対象を持つ指さしの空間位置によって、意味解釈が異なることを2015年度(平成27年度)の聞き取り調査で明らかにし、日本手話と音声英語による学会発表を行った。数量詞・代名詞表現に付随する高低の空間使用と意味解釈の「範囲(domain)」とのマッピングについて、アメリカ手話・ニカラグア手話・日本手話の三言語間の国際比較を行う研究に2015年度(平成27年度)に着手した。2016年度(平成28年度)に、同じ方法を用いて収集したアメリカ・ニカラグア・日本3か国の聴者のジェスチャーと、ろう者の手話による描写を録画した。2017年度(平成29年度)に、数量詞を含む文を用いる際に'more is up'の空間的メタファーの使用に関連する数量的分析を行った。2018年度(平成30年度)にも協議を行うなど、論文作成を進めている。

(7) 手話言語学ワークショップの運営

2014～15年度(平成26～27年度)に、ネイティブサイナーと言語学者が手話データについて意見を交換するワークショップを計5回開催した。言語学関係者やろう者・聴者の一般聴衆など、のべ200名以上の参加があった。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計5件)

Baba, Hiroshi, Kazumi Matsuoka, Phonological Contact in Kana-based Signs in Japanese Sign Language: A Preliminary Study, *Signed and Spoken Language Linguistics*, 査読有, 印刷中

松岡和美、前川和美、下谷奈津子、大学における日本手話クラスの現状と課題 マイノリティの言語と文化への理解を促す授業、*複言語・多言語教育研究*、査読有、第6号、2019、61-70

Yano, Uiko, Kazumi Matsuoka, Numerals and Timelines of a Shared Sign Language in Japan: Miyakubo Sign Language on Ehime-Oshima Island, *Sign Language Studies*, 査読有, 18:4,

2018, 640-665, DOI: 10.1353/sls.2018.0019

Uchibori, Asako, Kazumi Matsuoka, Split movement of wh-elements in Japanese Sign Language: A preliminary study, *Lingua*, 査読有, Volume 183, 2016, 107-125, DOI: 10.1016/j.lingua.2016.05.008

Kazumi Matsuoka, Uiko Yano, Hltomi Akahori, Norie Oka, Notes on Modals and Negation in Japanese Sign Language, *Studies in Language Sciences: Journal of the Japanese Society for Language Sciences*, 査読なし, 15. 2016, 1-20

〔学会発表〕(計14件)

Matsuoka, Kazumi, Masaomi Hayashi, Akiko Ikeda, Norie Oka, Early Development of Handshapes of Japanese Sign Language: A Preliminary Study. The 3rd International Conference on Sign Language Acquisition (ICSLA2018), Koç University, Turkey, 2018

矢野羽衣子、松岡和美、愛媛県大島宮窪地区の村落手話(地域共有手話)における二種類のタイムライン、第155回日本言語学会ポスター発表、立命館大学衣笠キャンパス、2017.

松岡和美、日本手話の right periphery の考察: 否定とモダリティ、日本英語学会第35回大会、東北大学川内北キャンパス、招聘、2017

Matsuoka, Kazumi, Uiko Yano, Kazumi Maegawa, Modal-negation interactions in Japanese Sign Language, Poster presentation at the sixth meeting of the Formal and Experimental Advances in Sign language Theory (FEAST Reykjavik 2017), the University of Iceland, 2017

松岡和美、矢野羽衣子、前川和美、日本手話のモダリティ表現にみられる証拠性、日本言語学会第153回大会、福岡大学、2016

Baba, Hiroshi, Kazumi Matsuoka, Phonological Patterns of Kana-based signs in Japanese Sign Language, The 5th Meeting of Signed and Spoken Language Linguistics, National Museum of Ethnology. 2016

Shimotani, Natsuoko, Kazumi Matsuoka, The acquisition of prosodic head nods by hearing L2 learners of Japanese Sign Language, Poster presentation at Pacific Second Language Research Forum 2016 (PacSLRF2016), Chuo University, 2016

Shimotani, Natsuko, Kazumi Matsuoka, Grammatical head nods of native and non-native signers of Japanese Sign Language: acquisition without explicit instruction, Poster presentation at The Japanese Society for Language Sciences 18th Annual International Conference (JSL2016), University of Tokyo, Komaba Campus, 2016

Sakamoto, Yuta, Kazumi Matsuoka, Missing Objects in Japanese Sign Language, the 12th Workshop on Altaic Formal Linguistics, Central Connecticut State University, 2016

Yano, Uiko, Kazumi Matsuoka, Number, Time Line, And Spatial Expressions In A Village Sign Language In Japan: A Preliminary Study Of Ehime-Oshima Island Sign Language, the 12th International Conference on Theoretical Issues in Sign Language Research (TISLR12), hosted by La Trobe University, Melbourne, 2016.

平英司、矢野羽衣子、松岡和美、宮窪手話の『数』に関する表現 日本における危機言語、社会言語科学会第35回大会、東京女子大学、2015

Matsuoka, Kazumi, Diane Lillo-Martin, Interpretation of Bound Pronouns by Hearing Learners of Japanese Sign Language, Poster presentation at the 2nd International Conference on Sign Language Acquisition (ICSLA 2015), University of Amsterdam, 2015

南田政浩、松岡和美、日本手話における否定的談標識としての首ふり表現、日本言語学会第149回大会。愛媛大学、2014

矢野羽衣子、松岡和美、平英司、愛媛県大島のビレッジサイン(手話方言)における数と時の表現、日本言語学会第149回大会ポスター発表、愛媛大学、2014

〔図書〕(計2件)

Matsuoka, Kazumi, Diane Lillo-Martin, Interpretation of bound pronouns by learners of Japanese Sign Language, In Nakayama, Mineharu, Yi-ching Su and Aijun Huang (eds.), John Benjamins, *Studies in Chinese and Japanese Language Acquisition. In honor of Stephen Crain*, 2017, 107-126

松岡和美、くろしお出版、日本手話で学ぶ手話言語学の基礎、2015、176.

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年：
国内外の別：

取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

松岡和美、小林信恵、日本手話を使ってカフェでの対話を試みよう（大会報告「身近な言語をもっと知ろう- 語は90分でここまでできる-」）中国語教育、2019、第17号、31-35

林雅臣、松岡和美、「ろう乳児の日本手話の発達研究プロジェクト」活動報告、明晴学園創立10周年記念シンポジウム報告書、2019、16-17.

松岡和美、NHK出版、NHK みんなの手話2018年7～9月/1～3月号、2019、116

松岡和美、NHK出版、NHK みんなの手話2018年4～6月/10～12月号、2018、120

矢野羽衣子、松岡和美、愛媛県大島宮窪町の手話：アイランド・サイン、科学、2017、5月号、415-417、外務省委託ウェブサイト公開の英訳版 Island Signs: The Sign Language of Miyakubo in Ehime Prefecture、

<https://www.japanpolicyforum.jp/archives/society/pt20170919090630.html>

松岡和美、授業計画案（小学生5年生～6年生）、岡典栄・赤堀仁美著、大修館書店、日本手話のしくみ練習帳、2016、82-89

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：内堀 朝子

ローマ字氏名： UCHIBORI, Asako

所属研究機関名：日本大学

部局名：生産工学部

職名：教授

研究者番号（8桁）：70366566

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：赤堀 仁美

ローマ字氏名：(AKAHORI, Hitomi)

研究協力者氏名：池田 亜希子

ローマ字氏名：(IKEDA, Akiko)

研究協力者氏名：岡 典栄

ローマ字氏名：(OKA, Norie)

研究協力者氏名：数見 陽子

ローマ字氏名：(KAZUMI, Akiko)

研究協力者氏名：小林 信恵

ローマ字氏名：(KOBAYASHI, Nobue)

研究協力者氏名：坂本 祐太

ローマ字氏名：(SAKAMOTO, Yuta)

研究協力者氏名：下谷 奈津子
ローマ字氏名：(SHIMOTANI, Natsuko)

研究協力者氏名：馬場 博史
ローマ字氏名：(BABA, Hiroshi)

研究協力者氏名：林 雅臣
ローマ字氏名：(HAYASHI, Masaomi)

研究協力者氏名：前川 和美
ローマ字氏名：(MAEGAWA, Kazumi)

研究協力者氏名：南田 政浩
ローマ字氏名：(MINAMIDA, Masahiro)

研究協力者氏名：矢野 羽衣子
ローマ字氏名：(YANO, Uiko)

研究協力者氏名：Kathryn Davidson

研究協力者氏名：Deanna Gagne

研究協力者氏名：Amy Lieberman

研究協力者氏名：Diane Lillo-Martin,

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。